8	8件（17名）	8件（17名）
9	7件（12名）	4件（ 8名）
10	4件（ 7名）	4件（ 7名）
11	3件（ 3名）	3件（ 3名）
12	4件（ 7名）	4件（ 7名）
13	3件（ 4名）	3件（ 4名）
自　由	35件（74名）	33件（72名）
資　料	8件（ 8名）	8件（ 8名）

（＊）採択のうち，4件（4名）（計画1件，自由2件，資料1件）は，未実施。

(3) 研究会

平成2年度は，「研究会」と小規模の「ミニ研究会」が以下のとおり採択・実施された。

A．研究会

1. ニホンザルの現況研究会
2. ニホンザル集団における優劣・順位の再検討
3. 遺伝・生化学的手法による霊長類の種分化と系統に関する研究
4. 第20回ホミニゼーション研究会「第20回記念・ヒト化と人間化」

B．ミニ研究会

1. ニホンザルの古生態地理
2. 霊長類のアレルギー疾患とその実験モデル
3. 霊長類の視覚機能
4. 霊長類の聴覚と音声

2．研究成果

A．計画研究

課　題　1

計画1－1：
宮城県におけるニホンザルの分布，個体数の現状と歴史的変遷およびその要因についての研究

伊沢　紘生（宮教大）
遠藤　純二（東浜小）
庄司由美子（岩沼小）

宮城県下のニホンザルの過去の分布復元，現在の分布，群れの数，個体数の推定等，これまでの研究成果を基盤に本研究が開始されたわけだが，2年目の本年度は以下の項目について調査を行った。

① 金華山のニホンザル5群については過去9年間継続調査を実施してきたが，本年は個体数増減にかかわる要因の一側面をさぐる目的で，5群の出産数や出産率の変化，アカンボウが出生後1年以内のどの時期にどのくらい死亡するかを集計し，それらと全個体数の変化や，気候変動，主要食物の生産量の年変化等との対応を考察しまとめた（伊沢1990，宮教大紀要）。

② 上記分析から金華山ニホンザル個体数増減に深く関与していることが明らかになった食物について，生産量を知る目的でシード・トラップを50ケ所設置し年間を通しての資料を収集した。現在収集資料の分析中である。

③ 前年度に調査した奥新川，二口，七ケ宿の3地域で群れの個体数調査を実施したが，それらを本年度再調査し，個体数の正確な把握と遊動域の変動の把握に努めた。それらの地域での植生調査も併せて実施した。

④ かつてサルが生息し，1985年のアンケート調査で群れの生息情報がなかった地域，北上高地について本年度はハナレザルの出現状況についての詳しい聞き込み調査を実施した。

⑤ これまで生息が報告されていなかった鳴子町の里山でサルの生息が確認された。しかしオトナのメスとそのコドモの2頭のみの集団であり，現在その由来について聞き込みを含めて調査中である。

⑥ 同時に，上述した地域でのサル狩猟の歴史や森林伐採の歴史，開発の歴史等の資料を収集した。これらの作業を次年度も継続することで，それぞれの地域におけるサルの生息状況の変遷とその原因を明らかにする予定である。

計画1－2：
熊本県における野生ニホンザルの分布調査　2
――球磨村と錦町を中心に――

藤井尚教（尚絅大）

熊本県における野生ニホンザルの分布状況は，1982年よりの調査で球磨郡川辺川流域と阿蘇郡南外輪山一帯が二大中心地になっていることが判明しているが，これら以外に球磨郡の錦町を中心とする大平山一帯と，球磨川右岸の球磨村の両地域においてはこれまで1集団しか見つからず，2集